

Title	定例研究報告会Ⅰ明治末期の物価騰貴 - 戸田海市と河上肇の所説をめぐって -
Author(s)	小野, 一一郎
Citation	経済論叢 (1980), 125(3): 213-214
Issue Date	1980-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/133807">http://hdl.handle.net/2433/133807</a>
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

# 經濟論叢

第125卷 第3号

---

哀 辭

故 穂積文雄名誉教授遺影および略歴

- フランス貴族商業論のひとこま 補論 ……………木 崎 喜 代 治 1
- 比較生産費説・国際価値論・貿易利潤(中)……本 山 美 彦 20
- ディルクの剰余価値論(上)……………岸 徹 47
- 19世紀末ドイツにおける「本源的蓄積」と  
土地所有(2)……………加 藤 房 雄 66

追 憶 文

- 先生の思い出……………伊 達 功 84
- 穂積文雄先生を偲ぶ……………桑 田 幸 三 92

経済学会記事

---

昭和55年 3 月

京都大學經濟學會

定例研究報告会が、昨年12月6日午後1時より4時まで、経済学部特別講義室において開かれた。二つの報告の要旨は下記の通り、いずれも報告者自身によってまとめられたものである。出席会員は28名で、質疑応答があった。

本研究報告会も瀬地山 敏、本山美彦両研究委員と院生委員の努力によって、定例として復活した。当日報告の労をとっていただいた小野——郎会員は、戸田海市、河上肇の紹介につづき、本会の良きルーツである法科大学時代の「経済学読書会」にふれられ、当時この会は西田幾多郎（文科大学）、福田徳三（東京商大）なども参加し、喧喧諤諤の活発な会であったと紹介された。当日予定を変え、小野会員、ひきつづき大学院生の田中 宏会員より報告をうけた。（事務局 細川 元雄）

## I 明治末期の物価騰貴 ——戸田海市と河上肇の所説をめぐって——

京都大学教授 小 野 —— 郎

### （報告要旨）

1870年代以降90年代の中葉にいたるまで低下傾向にあった物価は、96年以降、南阿産金の増大と共に、反転していちじるしい上昇傾向を示すにいたった。この19世紀末以来の金本位制下の物価騰貴問題は英米をはじめ、世界の経済学会の注目するところとなったが、たんに経済学会のみならず、ドイツ社会民主党内部においても、この原因をめぐってはげしい論争が戦わされたのである。

ところで、このような世界的物価騰貴の中で、同じく金本位制下にあった日本の物価はひとり世界的な物価上昇率をはるかにこえる上昇率を示した。

本報告はこの特異な形態を示したわが国の物価騰貴の原因について、当時もっともす

くれた分析を展開した本学教授戸田海市（かいち）の所説を紹介・検討すると共に、当時戸田の影響下にあつて、A. フィッシャー批判をとおして、世界の物価騰貴それ自体の原因を追及した河上肇の所説にも関説し、さらに戸田と河上との理論上の交渉と異同に言及することを目的としたものである。